

シスター弘田しずえに聞く (二) 危機の中、私たちも動く

編集部

ひろた・しずえ ●一九三八年生まれ。ベリス・メルセス宣教修道女会会員。ボリビア、ニカラグア、メキシコなどで奉仕、国際バックス・クリスティ・カトリック非暴力・カイニシャティブ執行委員、カトリック正義と平和協議会専門委員、女たちの戦争と平和人権基金理事など。

メキシコで目の当たりにした位階制教会の問題

四年ほどニカラグアにいて、その後メキシコに行きました。メキシコでは二〇世紀前半に革命があったのですが、制度的革命党(PRI)は、国中の組織すべてを手中に収め、政治権力と経済力、メディア、労働組合などの組織をコントロールし、そのあたりいろいろな不条理があり、言い出すときりがないのですが、カトリック教会との関係についてご紹介します。メキシコはバチカンと外交関係がなかったのですが、プリジョーネ大司教というバチカン大使が、メキシコ社会の有力者と親しい関係を保ち、メキシコとバチカンの外交関係の正常化を達成しました。しかし制度的革命党と癒着し、スペイン語で、PRIと呼ばれる制度革命党の「プリジョーネ」だと巷で噂されていたほどで

した。貧しい人々を優先する解放の神学の進歩的な司教、司祭たちを徹底的に攻撃したことも、政府にとって、好都合なことでした。

この大司教は、個人的なレベルでも問題人物で、問題の一つは、大使館で働く女子修道会との関わりでした。働いている五人のシスターのうちの一人を自分の愛人にしてしまい、修道会の総長が大変驚き、全員必ず二年ごとに交代させるのですが、愛人となったシスターはプリジョーネが交代させず、彼女の方も取り込まれてしまっています。総長は司教団に訴えてもどうにもならず、大使館の奉仕をやめようとするのですが、プリジョーネは、バチカンの奉獻・使徒的生活会省に連絡し、この修道会が創立のカリスマに従っていないから調査するように計らいます。その結果、修道会は、

文句を言わずに、大使館での奉仕をするようにと、バチカンから命令されてしまいます。最後はイエズス会が介入して、スキヤンダルが明るみに出されるわけですが、その後もプリジョーネは、修道会を退会して彼の財界の友人の世話で、メキシコ市にある有名な小児科病院に就職した愛人に、イタリアから、定期的に会いに来ていたことが報じられています。

プリジョーネは、マフィアとも関係があった人物ですが、大使職を解任されてローマに戻ってきた時、私はローマにいました。そしたらなんと、プリジョーネが教皇庁正義と平和協議会の委員になっていたのです！これは、とんでもないと思いました。私には何も力がないので、当時、聖心会の総長のメキシコ人、男子カルメル会の総長のメキシコ人、イエズス会の教育担当者のメキシコ人に「めちゃくちゃな人が『正義と平和協議会』に入っているから、どうにかしてください！』と訴えました。少なくともプリジョーネがその後枢機卿に任命されなかったのは、メキシコ時代の影の部分が影響していたからだという分析もどこかで読んだ記憶があります。

植民地主義からの問いかけ

アジアのカトリック教会は、人数的にも少数であり、FABC（アジア司教協議会連盟）が謳ったように生きた対話を社会とする営みが、当然、教会としての在り方となるわけですが、中南米のカトリック教会の現実に触れて、考えさせられることが多くありました。大陸全土が、カトリックであり、大陸全土が、スペイン語を話し（ブラジルは、ポルトガル語）、大陸全土に住む人々が、皮膚の色によって、分断されているという現実です。中南米、カリブ海の国々の社会を見ると、政治、経済の中枢にいるのは、白人、次に混血の浅黒い皮膚の人たち、次に先住民、最後に皮膚の黒い人という差別構造が今でも存在しています。植民地化とは、乱暴な言い方をすれば、人様の家に、ずかずか入って、お前は、劣る存在だから、私の言うことに全て従うべきだ、そうしなければ、いのちはないものと思えという図式に当てはまるのではないでしょうか。つまり、植民地化と人種差別は、表裏一体のイデオロギーであり、政策であり、文化だと思っています。中南米とカリブ海の国々の征服に同行したカトリック教会によって、人々は、霊も、死後の世界までかすめ取られてし

まったのです。

フィリピン、メキシコ、ニカラグアで触れたカトリック教会の現実には、イエスの福音が告げる「豊かないのち」を、一人ひとりが生きることが妨げている具体的な問題に、自分自身が取り組むように、私を招き続けています。それは、二〇二三年に向けて始まったシノドスの歩みに重なります。「ともに歩む教会」の実現のために、まず見なければならぬ課題の一つは、カトリック教会の半数以上を占める女性の存在です。

アジア・シノドスでの発題——具体的な提案

一九九八年開催された「アジア・シノドス」で教会における女性について発言しましたが、二〇年以上前の内容は今でも有効だと思います。今でも有効ということは、まだ解決されていないジェンダー正義の問題が続いて存在しているということなのですが、同時に、教会が、変わり始めていることを示す事実も、見逃してはならないでしょう。以下アジア・シノドスでの発言からです（弘田鎮枝「家庭と社会における女性の尊厳の尊重」『アジア特別シノドス報告』カトリック中央協議会、一九九八）。

このシノドスは、21世紀に向かうアジアの教会の「新しいアプローチ、新しい神学的表現、新しい方法論、諸宗教の新しい理解」（『討議要項』第55項）を求めて開かれました。人間としての尊厳に関する女性の目覚めは、過去25年間を通じ、現代世界における最も意味深い「時のしるし」の一つです。教皇ヨハネ・パウロ二世は使徒的書簡『女性の尊厳と使命』で、このテーマが「近年、特に重視されるようになりました」（第1項）と言っています。

女性にかかわる問題について、アジアの教会はどのようににこたえてきたのでしょうか。

- ・ 経済構造によってもたらされる「貧困の女性化」
- ・ 特に観光と性産業において女性と少女を商品として扱うこと
- ・ 家庭内と社会における女性に対する暴力
- ・ 家庭、社会において女性を従属的な立場に追いや、女性が平等に扱われないことを文化と宗

教で正当化すること

アジアの教会は、すべての女性と少女の人間としての基本的尊厳と平等性が、考え方、態度、行動において尊重されるようにとの要求に対して、どのようにこたえてきたでしょうか。

1 1986年東京で開催されたアジア司教協議会連盟（FABC）第4回総会の声明から。

「世界人口の半数を占める女性を認知し、その尊厳を返し、世界と教会において正当な役割を果たすのを許すことは、単に人間として必要なだけでなく、福音が命じるところなのです」（『アジアと世界における信徒の召命と使命——第四回アジア司教協議会連盟総会最終報告』第二部、三、3）。

2 アジア司教協議会連盟（FABC）信徒局が1995年に開催した「女性についての司教研修会」から。

「人類の半分が非人間的に扱われることによって、人類全体が貧しくされます」。

3 1995年マニラで開催された、アジア司教協議会連盟（FABC）第6回総会では、女性に対する不正義を根絶し、正しいジェンダーの関係をもたらすため、教会の責任あるかわりが、緊急に求められていることを強調しています。

「共同体間の交わりによる大きな一つの共同体である教会は、その倫理的、霊的力を用いて人々の精神構造に回心をもち、社会構造を変革し、アジアの女性が神から受けている尊厳を否定するような行為を根絶しない限り、豊かないのちというキリスト者としての未来像を実際に発展させていくことはできません」（『今日のアジアにおいてキリストの弟子として生きる——いのちへの奉仕』15. 2、『紀元2000年に向かうアジアの教会』より）。

4 アジアの教会は基本的に女性の教会です。教会に積極的に参加する人々の70%から80%が女性であるという国は少なくありません。司牧活動、貧しく差別されている人々への奉仕、エキューメンカルな対話、また諸宗教との対話を通して正義と平和のために働くこと、すべての女性、男性、子ども、の尊厳と平等のための連帯行動などにおいて、女性の存在と働きは、重要かつ有意義であると言わなければなりません。

女性の叫びに対して預言者的にこたえることなしに、アジアにおける教会の新しいあり方を実現していくことは不可能です。教会は「社会や世界で女性の尊厳と自由の確かなしるし」になることを問われています（『アジアと世界における信徒の召命と使命』第二部、三、6）。教会が女性に対して犯した過ちと、無感覚であったことに対して、教会としてゆるしを願った教皇ヨハネ・パウロ二世にこたえる具体的な表現を見なければなりません。「悔いるこころ

が、教会全体として福音のビジョンを忠実に生きる新たな決意となりますように」（教皇ヨハネ・パウロ二世「女性への手紙」3、1995年6月29日）。

このシノドスが勇気ある一步を踏み出すために、具体的な提案をします。これらの提案はアジア司教協議会連盟（FABC）信徒局主催の「女性についての司教研修会」（1995年）の決定に基づいており、またアジア修道女連盟（AMOR）によって支持されています。

1 母なる教会のメンバーは、あわれみと優しさに基づく、対等かつ健全な人間関係、自然との関係を築くため、交わりを創りだす人となるよう招かれています。

2 神学校、宣教養成のコースにおいて、女性の経験と視点に基づいた神学が教えられること。

3 母なる教会の男性メンバーが、イエスにならない、女性的見方と態度を発見し、それに成長すること
はきわめて必要、かつ重要である。それによって、
支配の論理が人間と自然を破壊している社会にお
ける彼らの働きが、より豊かに人間らしく、また
真にキリスト的になることができる。

4 将来の司祭は、宣教の働きにおいて女性を対等
の仲間、ともにキリストに従う者として受け入れ
るよう養成されること。

5 洗礼を受けたすべての人が基本的に平等である
ことが認められ、また教会が女性を対等のパート
ナーとして尊重する具体的なしとして、下記
の5項目を提案。

- ・教会のすべての組織に少なくとも30%の女性参
加があること
- ・教会組織で働くすべての女性(修道女を含む)
に対して、正しい給料が払われること

・女性が神学を勉強するために必要な機会と助け
が与えられること

・各教区に、特に女性と子どもに対する人権侵害
に取り組む委員会が設置され、地域、国、国際
的な組織と連携しながら、適切かつ効果的な行
動をとること

・教会で使われる言葉が、常に男性と女性の平等
性を表すものであること

わたしたち女性がアジアにおけるイエスの愛と奉
仕の使命に献身するために、この旅路の同伴者とし
てマグニフィカトのマリアがともに歩んでくださ
いますように。

(1998年4月23日)

男女が共に働くためにどうしたらいいか

二〇〇九年から一八年まで私はローマにいたのです
が、修道会の総長連盟のJPIC(正義と平和 Integrity
of Creation、環境の保全)で、教会における男性と女性

だけではなく、あらゆる人の権利と尊厳を尊重する真の包摂的な世界を目指しています。

の共働チームというのを立ち上げました。人数は少なかったのですが、社会における不正の問題に取り組んでいる「正義と平和」が、教会における正義の問題にも目を向けなければならない、男性と女性が、真に協働する教会になるためのささやかな、でも有意義な取り組みでした。差別の問題は、社会、組織の問題であると同時に、一人ひとりが自分としてどのように関わっているかという、極めて個人的な課題です。メンバーは、まず自分自身の態度、姿勢を反省し、気づかないうちにすりこまれている偏見や差別意識を丁寧に見直すことから始めました。一人のカルメル会の司祭の発言。「男性だけの修道会で、考えたこともなかったけれど、ある時、男女のカルメル会が初めて一緒に集まり、話し合いをしたことがあった。その時、シスターたちが、自分の考えを明確に表現し、男性だけの集まりでは、経験したことのない豊かさを感じた。それ以来、集まる時は、必ずシスターたちの参加を主張し続けている」。カトリック教会では、フェミニズムについて、正しくない偏見のあることも問題です。パパ様も、フェミニズムについての発言は、いつも非常に否定的ですけど、本当のフェミニズムは、女性差別

アジアの教会での経験を思い出します。人間開発事務局が、教会と労働というテーマで会議を香港で開催したのですが、司教、司祭と一緒に信徒女性、修道女も参加していました。このような会議で女性は常にマイノリティーなのですが、グループ作業のために、通常は、女性が男性の中に、マイノリティーとして入ります。ところがその時は、女性だけのグループで話し合い、発表することになりました。結果として女性グループの発表は、内容的にも豊かで、また発表の仕方でも非常にクリエイティブで、男たちのグループより、ずば抜けて優れていたのです。そこに参加していた司教、司祭は、多分初めて女性の能力を目の当たりにして考えさせられたのではないかと想像しました。教会の男性たちは、女性のパワーを体験し、素直に受けとめ、そこから学ぶことに招かれています。素直を強調したいのは、タイで神学校の神学のクラスに修道女が参加するようになったが、修道女の方が優秀であることに気づいた神学生が、気分を害するので断るようになったという話を聞いたからです。「バカじゃないか」

と言いたくなりますよね。

国際男女修道会総長連盟も協働を目指している

シノドスの歩みは、まさに誰も差別、排除しない教会を目指していますが、二〇二一年三月に初めて、国際男子修道会総長連盟と国際女子修道会総長連盟がオンラインで集まりました。これまで、ローマに本部を置く両連盟は、別々に総会を開催していましたが、二〇二一年は、五月の総会を共催することで、三月から二度にわたって準備の集まりが開かれました。それまでの講義を聞いて話し合うというプロセスが、六名程度の男女のグループで、パパ様の『兄弟の皆さん』の友情について、一人ひとりが、いつ、どんな時に異性の相手を本当に友達と感じたかについて体験を分かち合うという、とても個人的なレベルの分かち合いになりました。それをオンラインで数回行い、総会をするときには、皆が個人的に知り合っているという状況が創られていきました。それで「連盟として、自分たちは一緒にいなくてもいいのではないか」という話が出てきました。総長・管区長会が、男女一緒である国は、オーストラリア、スペインなどで存在していますが、

最近バチカンの奉獻・使徒的生活会省から、各国の女子修道会の総長・管区長会と男子修道会の総長・管区長会が、一緒にになりなさい、という勧告が出ているようです。

女子修道会総長連盟、教皇に直訴

二〇一三年に就任された教皇フランシスコとUIG (国際女子修道会総長連盟) との関わりは、パパ様が実現し続けていらつしやるバチカンにおける女性の登用と関係があると思います。

そもそも二〇一三年に教皇フランシスコになった時、パパ様と男子総長連盟が集まることになり、イエズス会のニコラス神父が会長でしたが、それまでだったうやうやしく謁見という感じだったのが、「いや、差して自由に話し合います」ということになりました。みんなびびくりしましたが、それならそういうようにしましうということ、集まる場所も変えて「自由に質問してください」と。一〇時からだったのが、「いやいや、九時半ごろから」と、三時間くらい、本当にいい話し合いで、お昼近くになったらパパ様は「残念ながら、歯医者予約があるから、失礼します」

なんて言って終わりになったそうです(笑)。

そういう話を女子総長連盟は聞き、驚きました。女子は三年に一度しか集まりがないのに、二〇一三年の総会での謁見は、水曜日の一般謁見前の一〇分か一分だけで、しかも会長の発言もなく、一方的で、いわば内容に乏しいものでした。男子修道会の総長たちと比べて、あまりにひどいではないかという話が、ローマの女子修道会の総長の集まりで話題となりました。女子修道会総長連盟は、地理的な配置から全世界に五〇くらいの「星座」(Constellation)と呼ばれる組織としてまとまっているのですが、ローマには修道会の本部が多くあり、毎年一月に集まっています。二〇一四年集まった時に、「パパ様に直訴だ」ということになりました。いろいろな要求を文書で書いて提出しましたが、その中の一つは、「次の二〇一六年の総会の時はもっと長く時間をとって話し合えるようにしてください」というお願いでした。

二〇一六年の総会では、パパ様と対面でお話ができる時間をいただけることになり、全世界の「星座」に「どういうことをパパ様との議題にしたらいでしょうか」というアンケートを出したところ、五〇パーセ

ント以上が教会における女性の地位に関する質問を希望していました。

女性登用への動きへ

その結果、二〇一六年の総会では、UISGから、前もって、五つの質問をパパ様にお出しし、それについての答えを直接にいただきました。一つはバチカン各省の次官についてです。バチカンの各省のトップの長官の下に次官がいますが、次官は今までだったら、かならず男性で司祭でした。司祭が次官になるとあつというまに大司教になるのです。その次官は女性でもいいのではないかという質問がまず一つ。その後、バチカンの複数の部署で女性が次官となっていますが、ほとんどが、信徒の女性です。最近では、バチカン市国のいわば行政庁の長官にシスターが任命されています。ベールなしの私服のシスターであることも新しい現象です。

また、バチカンの奉獻・使徒的生活会省は、世界の修道者を取りまとめている省ですが、修道者の八割が女性ですよ。大部分が女性である修道生活について方向性などを示す諮問組織に、女性がいないことをパ

パ様は、ご存じなかったようです。それで、「それは大変だ。早速どうにかしましょう」という感じのお返事で、そのあと二、三年たつてから、六人の女子修道会の総長が同省のメンバーになりました。マリアの宣教師フランシスコ修道会の総長、サレジアン・シスターズの総長などです。そういう動きがありました。

パ様との対話で、もっとも話題となり、メディアに大きく取り上げられたのは、歴史上、存在していた女性の助祭についてです。これに対して、パ様は、すぐにこの問題について研究する委員会を立ち上げると返答され、委員会のメンバーを推薦するようにUISGに頼まりました。UISGはアメリカ人の一般信徒で助祭のことに非常に詳しい女性神学者、フィリス・ザガノの名前を出しました。一二人のメンバーのうち六名、女性を選ばれ、一人はローマ在住でしたが、フィリス一人だけは、米国からの参加でした。ただし、この委員会についてはまったく報道がなく、ローマにいたフィリスも緘口^{かん}令で、一切発言することができない状況で二年以上過ぎました。

三年後の二〇一九年、女子修道会総長連盟と教皇の集まりが、総会中に開かれました。この集まりで、注

目されたのはそのスタイルで、今まででしたら謁見で使われるパウロ六世記念ホールの上の方にパ様がいまして、下に皆がいたのですが、以前のようにざろざろと大司教たちなどが行列してついでくるようなことはなく、総長連盟の会長と事務局長だけがパ様と一緒に歩いてきて、壇上ではなく、パ様は教皇が座る予定の壮麗な椅子をどけさせて、簡単な椅子を二つ置き、会長と並んで座られました。

パ様はこのように、おっしゃることよりも態度とか、なさることと言いたいことをまず伝えていく。言葉よりもまず態度があるのです。謁見では、必ず事前に準備された講話の原稿があるのですが、「これはあとで読めばいいから、今は読まない」とおっしゃり、「なんでもいいから聞いていてください」と、そういう感じだったのです。その時、会長に「これが助祭についての最終的な文書です」と渡されました。

それで結局何がわかったかというと、要するに意見が割れている。女性助祭が歴史的にいたことは明白で、例えばパウロの手紙（ローマ16・1）にも書いてあるフエベとか、女性助祭がいたということは確たる事実ですが、何が論点になったかというと、要するに叙階で

はなく、ただの按手^{あん}だったのじゃないか、とか、叙階であるにしても、同じ叙階ではなかったのではないかという差別的な意見割れだったということです。

その後もう一度、女性助祭の可能性を検討する委員会ができるのですが、女性助祭について最も詳しい神学者フィリス・ザガノは入らず、メンバーも女性助祭に否定的な学者が多いと聞きました。

教会は動いている

ただ私が大事だとは思うのは、いろいろなレベルで教会の中は動いているということです。

シノドスには、通常、男子の修道会総長連盟からは一〇名参加者を出すのですが、叙階されている司祭には皆投票権があります。二〇一三年の家庭についてのシノドスに男子修道会総長連盟から代表としてブラザーが参加し、初めて投票権が与えられました。記者会見の席で、「あなたは叙階されていないのに修道者として投票権が与えられました。投票権のないシスターと比べて何が違うかというと、男性であるということだけでですね」と言われ、「そうなんです。だから居心地が悪くて辞退しようと思いましたが、パパ様直接の

配慮ですの……」ということがありました。

また、次の青年シノドスの時、ラサール会とマリスト会の総長のブラザー二人に、投票権が与えられました。「おかしいじゃないか」ということでキャンペーンが起き、ネット上でも、例えば、ベールを被ったスイスのベネディクト会のシスターたち全員が「女性に投票権を与えよ」とプラカードを掲げている映像が流れました。

そういう動きが、今回のシノドスにつながっていくのだと思います。さらに、シノドス総合事務局のナンバー2にフランス人のシスター・ナタリー・ベッカーが任命され、シノドスの歴史上初めて女性として投票権を持って参加することになりました。三〇〇人近い参加者の中のただ一人ですが、それでも、何かが始まっていると感じます。ちなみにシスター・ナタリーも私服です。

なぜ私服にこだわるかというと、バチカンでは公会議後も長い間、修道女が、ベールをつけて修道服を着ることを強調し続けてきました。一九九八年アジアのシノドスに参加する手続きのために事務局に行った時、頭の前から足の先までじろつと見られて、「修道服

は？」と言われたので、「これが修道服です」と答え
たことを思い出します。

革命的な動きとなるか？

今回のシノドスでは、参加する全員、信徒にも発言
権と投票権があるべきだと思います。中南米・カリブ
地域では、どんどんそういう動きが活発化していて、
各地で「神の民」の集まりが繰り返され、二〇二一年
一月二一日から二八日まで、オンラインと対面のハ
イブリッドで四〇パーセントが信徒で構成されている
シノドスの話し合いが、メキシコで開催されました。
プロセス全体では、七万人の参加でした。

ドイツでもその方向への動きがあり、米国は、教区

によりバラツキが多く、全く動きのない教区もあるよ
うです。日本では、どうなるかはわかりませんが、い
ままでのようなシノドスとは違う方向性が示されてい
ます。これが本場に実現すれば革命的な動きなのです。
本場に第二バチカン公会議が目指した神の民に戻って
いく、そして、二一世紀にふさわしい教会の実現とい
うことです。

このように、私たちの意識の変革が、パパ様から促
されています。パパ様は二〇二〇年一月にアッシジ
で「フランシスコの経済」というオンラインの国際会
議を開催され、そこには二〇〇〇人の若者が参加しま
した。今ある経済は、いのちを奪い、殺す経済で、人
を差別し、排除する、自然資源を略奪するものである



本田哲郎対談集

本田哲郎、浜 矩子、宮台真司、山口里子、M・マタタ 著

福音の実り

互いに大切に
しあうこと

貧困や差別という現実のなかで、イエスの福音を掲げるとはいかなること
か。釜ヶ崎での活動をもとに聖書を読み直す本田神父と気鋭の論客が、人
が人として大切にされる福音の実りを求めて語り合う。

定価1650円

オリエンス宗教研究所

☎ 03-3322-7601

FAX 03-3325-5322

www.oriens.or.jp

から、そうではなく、本当にすべてのいのちを生かす経済が必要だ、ということを訴え、これに代わるオルタナティブ経済の具体例が話されました。

また、世の中が変わらなければいけない、そのために必要なのは教育だというパパ様のアピールを具体化する「教育のグローバル協定」が打ち出され、全世界のカトリック学校に、またインフォーマル教育に取り組む組織に呼びかけています。学校教育の事業体を持つ多くの修道会が、それを着々と実行しています。

来年（二〇二三年）の「世界平和の日」の教皇メッセージのテーマは、「教育、仕事、世代間の対話——恒久的平和構築への手段」となっています。バチカン・ニュースが紹介している内容は、恒久的平和の実現のために必要な条件は、今の世代と未来の世代のニーズに応えることであり、そのために「信仰の目で時代のしるしを読むこと」で、直面しなければならぬ新旧の疑問を正しく理解することができると指摘しています。さらに、変化し続けている三つの広大な文脈が、呼び起こす疑問に取り組む必要があります。

・世界において、仕事は、正義と自由を求める人間の

重要なニーズに、多かれ少なかれ応えているか？

・人々は未来を信じているか？

・異世代間は、連帯を生きているだろうか？

・政府はこのような状況の中で、平和の地平線を設定することに成功しているだろうか？

教会の福音宣教使命は、世の中を変える使命であることが、『ラウダート・シ』『兄弟の皆さん』の招きにはつきりと示されています。新型コロナウイルスが暴き出した現代世界の不正と矛盾に対して、私たちが、どのように取り組むかの具体的なプランを生き方として、関わり方として、ナザレのイエスに従う者として、祈りのうちに深め続けたいと願っています。

ダイバーシティ&インクルージョン

浜^{のりこ}矩子さんという経済学者がいらつしゃいますが、いつも、現実に対する鋭い分析に啓蒙されております。野宿者と連帯する『ビッグイシュー』という雑誌に連載で毎号コラムを執筆されていますが、最近「ダイバーシティ&インクルージョン」について書かれたものを読み、「これだ!」と感じました。「近頃はやりのD

&I」というタイトルで「目指すべき場所は多様性と包摂性が出会う場所。そこにグローバル時代の真の姿がある」(『ビッグイシュー』421号 14ページ)という言葉に、我が意を得たりと感じると同時に言葉としては一人歩きしているけれど、実際の社会においては、実現どころか、ますますインクルージョン(包摂)どころかエクスクルージョン(排除)に流れている現実を見えています。

修道生活においても違いを受け入れ、違いから学び、自分が変わり成長する招きが、現代における奉獻生活の中心的な課題であることが、二〇年以上前から強調されてきました。ほとんどの修道会が抱える問題の九〇パーセント以上が、人間関係からくる困難であること、実は一人ひとりの会員の態度、姿勢、気持ちを直すことで解決するはずであるにもかかわらず、依然として変わらない、変わらない痛みが、福音宣教の意義ある使命に影を落としています。さらに、現代においては、修道生活が、以前より多民族、多文化、多言語となり、違いを豊かさとして受け入れることのない限り、預言者的証しとして社会に生きることが空洞化してしまします。多文化の共生を実践することなしに

修道生活に未来はないと司祭であり社会学者であるアンソニー・ギデンスが言い切っています。偏見、差別、排除が、国の政策になるような時代に、全ての人の権利、尊厳、対等なありようを生き、告げ知らせる修道者であることが、改めて求められます。

気候変動、難民、移民、貧困、紛争、戦争、環境汚染、使い捨て文化、差別、排除などによって、いのちが脅かされ、安全で安心できる生活のできない人々が、私たちの近くでも苦しんでいます。大地の叫びと貧しい人の叫びに応えるようにと招かれるパパ様の思いは、この星に住む一人ひとりが、一人も残されることのない真に包摂的な世界を目指す希望につながります。多様性を認めない狭さは、いのちを奪う暴力にさえもなるのです。「目指すべき場所は多様性と包摂性が出会う場所」。教会も、私たちの属する組織も、家庭も、自分自身の心も、つながることがいのちを豊かにする真理を懸命に生きたいものです。

【完】

二〇二二年一月一五日、東京・高円寺の
メルセス会本部修道院にて取材